

青梅市文化財ニュース

第 2 2 5 号

平成 1 8 年 7 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859）

若 鮎 の 像

アユは、日本の夏の川を代表する魚です。その姿は美しく美味で、香は甘いスイカの匂いがして「香魚」ともよばれています。そのアユの記念碑が、釜の淵公園の柳淵橋たもとにあり、アユの美しさを女性に^{なぞら}準えてデザインされた「若鮎の像」です。

多摩川は、古来「調布玉川」と呼ばれ、織布を漂白するための砧とアユ漁が主な産業でした。江戸時代には海からアユが^{さかのぼ}遡ってきて、水質純清な青梅で育って始めて「多摩川鮎」の特色を発揮し、美味となり、徳川幕府へ毎年献上していました。しかし、下流に羽村の堰が造られ、明治期の改修によって、アユの遡上が妨げられる様になり、明治 31 年(1898)からは全く遡れなくなってしまいました。

大正 2 年(1913)になり、東京帝国大学農学部の石川千代松博士が琵琶湖産のアユの放流実験を行ないました。琵琶湖で一生を過ごすアユは、10cm ほどにしかならず「コアユ」と呼ばれ、当時は海から遡ってくる普通のアユとは別の種類と考えられていました。しかし進化論者の石川博士は、「琵琶湖のコアユは食物不足の為に体が小さくなったにすぎないのだから早く適当な環境へ移してやれば大きくなるに違いない」と考え、その試みに 300 尾のコアユを大柳河原に放流してみました。三多摩の郡役所の報告では“不結果”ということでしたが、後になって確かに立派なアユを釣ったという証人が現れました。水産局の役人達は「いくら石川先生が進化論者でも、2、3 寸の小アユがいきなり 8、9 寸の大アユになってたまるものか」と冷やかしたそうですが、その後も各方面で追試され、今日の盛大なアユ放流事業に発展しました。それを記念して昭和 4 8 年(1973)に漁業組合を中心とした有志によって「若鮎の像」が建てられました。

現在、琵琶湖のコアユは、病気の問題で放流種苗として敬遠される様になってきましたが、近年、多摩川下流域の水質向上によって、東京湾からのアユの遡上が見られる様になってきました。羽村の堰などの魚道の整備が進み、近い将来、青梅の多摩川鮎復活を期待したいと思います。

（文責 大久保 芳木）